

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

第72回全日本剣道選手権大会・第63回全日本女子剣道選手権大会
優勝インタビューを受ける竹ノ内佑也選手（左）と近藤美洗選手



男子

竹ノ内佑也（東京）が 10年ぶりに日本一奪還

第72回全日本剣道選手権大会・第63回全日本女子剣道選手権大会が11月3日、日本武道館で開催された。剣道男女日本一の座をかけた、前年度優勝者2名と全国の予選を勝ち上がった126名（男女各63名）、計128名の選手たちが激闘を繰り広げた。

男子決勝は竹ノ内佑也と合屋龍（京都）が対戦。竹ノ内が小手と面を決め、10年ぶり2度目の優勝を果たした。

女子決勝は近藤美洸（東京）と渡邊タイ（熊本）が対戦。近藤が面と小手を決めて初優勝を決めた。

男子の剣道日本一を決める全日本剣道選手権大会は、昭和39年から日本武道館で開催されているが、全日本女子剣道選手権大会が日本武道館で開催されるのは史上初となる。男女同時開催に伴って選手の応援に駆けつける人数も増え、3階席まで観客で埋め尽くされるほど、多くの人で会場は賑わった。



決勝=竹ノ内（左）が小手で一本を先取る

○試合ルール

試合時間は5分、3本勝負で、時間内に勝敗が決しない場合は延長戦（3分区切り）を行い、先に一本を取った選手が勝ちとなる。

決勝

竹ノ内 コメー 合屋

試合は初優勝を狙う合屋が積極的に技を仕掛ける展開で進む。竹ノ内は静かに打突の機会を窺う。序盤戦で竹ノ内が諸手突きを放ち、僅かに外れるも、その技を契機に徐々に竹ノ内が試合のペースを掴んでいく。中盤戦では竹ノ内が合屋の技に応じ技を合わせる機会が増え、合屋が攻め急いで手元を上げた瞬間を、竹ノ内が小手で一本を先取。二本目、合屋はなんとしても取り返したい場面であったが、竹ノ内の厳しい攻めを崩せず、竹ノ内は勢いのある遠間からの面で二本目を奪い、完勝。結果として、竹ノ内は1回戦から決勝まで全て時間内に勝利を収め、圧倒的な力を見せつけ10年ぶりに日本一に返り咲いた。

準決勝①

合屋 ドメーコ 棗 田

序盤戦、棗田龍介（広島）の面を合屋が返し胴で応じ、先取。積極的に技を仕掛け反撃を試みる棗田は中盤戦、昨年の決勝を彷彿させる飛び込み小手を決め、追いつく。試合時間残り僅かの場面、近間での攻め合いから合屋が豪快な飛び込み面を決め、勝負あり。接戦を制した合屋が決勝へ進出した。

準決勝②

竹ノ内 メー 松 崎

序盤戦から慎重な攻め合いが繰り返される中、竹ノ内が連続技を繰り出し、面で一本を先取。松崎賢士郎（茨城）は反撃の一本を狙うも、竹ノ内が巧みに防ぐ。試合終了間際、攻めあぐねた松崎に、竹ノ内がダメ押しの飛び込み面を決め、勝負あり。竹ノ内が10年ぶりの決勝進出を果たした。



準決勝①＝合屋（右）が面返し胴を繰り出す



準決勝②＝竹ノ内（左）が飛び込み面で一本を決める

◎優勝者インタビュー
10年ぶりの優勝で

改めて全日本選手権の重みを感じました

竹ノ内佑也選手（東京／警視庁）



今日じゃなかったら優勝していなかったかもしれないです。この大会には魔物がいると思っています。この大会に強い人でも一回優勝できるかどうかという世界で、たまたま今日運が自分に向いただけだと思います。

（合屋選手は）独特なスタイルを持つている選手なので、相手にペースを渡さないように5分間戦い切る気持ちで臨みました。一本取ってから

も気持ち途切らさずに二本目を取ることができたので、理想の形で試合をすることができました。

◇
初めて優勝した時はまだ学生で、ただただ無心で試合をすることができていました。その後、毎年「絶対

に今年こそいける」と周りから言われ、何回か優勝のチャンスはあったものの、どこかで集中が切れたり、勝てる相手に勝てないということが続きました。その中で、自分の剣道のスタイルは維持しつつ、足りないものを補っていく稽古を続けて、10年経ってようやく優勝できたのだと思います。再度優勝して、このタイトルの本当の重みを感じられるようになりました。

◇
来年もこの優勝の名に恥じない、またひとつ進化した竹ノ内佑也を見ることができたらいいと思います。

◇
今回の男女開催という形式は良い試みだと思っています。なかなか女子剣道にスポットが当たることが少ないので、男子だけでなく女子もこの日本武道館という舞台で日本一を争い、それを見た少年少女が少しでも剣道に興味を持ってくれることを期待しています。

●入賞選手コメント
準優勝Ⅱ合屋龍選手

(京都／京都府警)

「一本目の小手は完全に攻め負けて手元が上がってしまったところでした。二本目も取り返しに急いだところを面に乘られたので、何も言うことがないですね。1回戦から『自分の剣道を貫く』という気持ちで臨み、準決勝まではそれができていたのですが、決勝では竹ノ内選手を前にその気持ちを発揮することができませんでした。竹ノ内選手とは剣道の質だけでなく、気持ちの面でもまだ敵わないのかもしれない。」

幼い頃から日本一を目指していました。先日行われた警察の大会でも結果が残せませんでした。今日こそは優勝するという気持ちで臨んだので、今は悔しいという気持ちだけです。また来年も出場して、次こそは優勝したいです」



準優勝＝合屋龍選手

3位Ⅱ粟田龍介選手

(広島／広島県警)

「昨年は警察学校に入校して思うように稽古できない期間がある中、周囲の人に応援してもらいながら優勝しました。この1年間は稽古会や講習会など多くの人と稽古する機会がありました。環境は違えど感謝の気持ちは忘れずに稽古しようと思っていました。まだ心の幼い部分があるので、そこをしっかりと鍛えて、目標である日本代表選手として世界大会に出場する夢を叶えたいです」

3位Ⅱ松崎賢士郎選手

(茨城／筑波大教員)

「竹ノ内先輩がとても好調だったので、その波に吞まれないように攻め続けようと自分に言い聞かせていました。ですが、やはり相手の攻めを受ける形になってしまったところを一本に繋げられてしまいました。世界大会後の焦点をここに合わせて、途中の大会で自分の現状を把握しながら準備はしてきたつもりでした。また一からチャレンジャーとしてこの大会に戻って来られるように頑張ります」

●注目選手

ともに男子最年少出場(21歳)。

・岩原潤哉選手(徳島／鹿屋体育大4年)

「日本、世界でトップ選手として活躍する竹ノ内選手と、この大舞台で戦えたことがまず嬉しかったです。試合をしてみても、今の自分では歯が立たないと思ったので、これからまた頑張りたいと思いました」

・大平翔斗選手(栃木／鹿屋体育大4年)

「最後に不用意に飛び込んだところを後打ちで打たれてしまいました。前半は自分の流れで試合を進められていただけに、もったいなかったです」

・橋本圭一選手

(埼玉／伊田テクノス)

男子最年長出場(44歳)。小柄ながらもベテランの風格を漂わせる試合運びで会場を魅了。

「若い頃のフィジカルだけの剣道から脱却し、自分の剣道が技主体ではなく相手を動かしていく剣道へ変化していくのを感じました。今回の大会は前回と同じベスト16ですが、自分の中では及第点だと思います」

・村上泰彦選手(愛媛／愛媛県警)

第70回大会優勝・村上哲彦選手の

兄。5年ぶり3度目の出場。

「長らく予選を突破できず、その間に弟が優勝した時は観客席で見ながら、『自分は何をやっているんだろう』という葛藤を抱き、自分の剣道を見つめ直しました。時間はかかりましたが今回出場することができました。ここから再スタートしていきたいです」

・木村恵都選手(大阪／大阪府警)

※世界大会Ⅱ個人3位

「今回初出場で、世界大会とはまた全然違う緊張感がありました。この大会は、世界大会で勝てたから勝ち上がれるというような簡単なものではないと感じました」

・星子啓太選手(東京／警視庁)

※世界大会Ⅱ団体・個人優勝

今年の世界大会、警察剣道選手権大会で優勝し、本大会も優勝をきたいされていた星子選手が、3回戦でまさかの敗退。インタビュー中も茫然自失な様子だった。

「自分の剣道が全くできず、技も打ち切れませんでした。この大会に向けて、警視庁を挙げてサポートしていたのですが……自分の弱さゆえの結果だと思います」

女子

近藤美洸（東京）が初優勝



決勝=近藤（右）対渡邊

決勝

近藤 メコー 渡邊

ともに出場10回目、全日本人賞経験に富むベテラン同士の決勝。試合開始直後、小刻みに攻め込んだ近藤が飛び込み面を放つと、渡邊の出がしらを見事に捉え一本。近藤は一本を先取しながらも積極的に技を繰り出し、渡邊も面、引き胴と反撃する。試合中盤、近い間合いから渡邊が面を繰り出したところを、近藤が出ばな小手で捉え、勝負を決めた。

近藤は今年7月に開催された世界選手権大会の女子個人戦でも優勝。世界を魅了した剣道を惜しみなく発揮し、日本武道館開催初の女子剣道日本一の座に輝いた。



準決勝①

渡邊 ムー 松本

準決勝②

近藤 ムー 妹尾

全日本優勝経験を持つ選手同士の試合。序盤戦、渡邊が鋭い足捌きで攻め、捨て切った飛び込み面で鮮やかに一本を先取。その後、試合巧者の松本弥月（神奈川）が多様な技で反撃を狙うも、渡邊が一本を守り切り、勝利。渡邊が決勝進出を決め、2連覇に王手をかけた。

両者は昨年の大会でも準決勝を争い、妹尾舞香（福岡）が勝利を収めている。お互いに手の内を知る両者の試合は延長戦に突入。緊迫した攻め合いの中、近藤が思い切った飛び込み面を放ち、一本勝ち。昨年のリベンジを果たした近藤が、初の決勝進出を決めた。



準決勝①=渡邊（右）が面で一本を奪う



準決勝②=近藤（右）が妹尾の手元が上
がった瞬間を攻め込む

●優勝者インタビュー 近藤美洸選手（東京／警視庁）

これからも自分のスタイルである

「攻め続ける剣道」で戦っていきます



に行ったわけではないですが、最後まで攻め続けようと思っていました。最後は相手が不用意に出てきたところに面を決められたのだと思います。

念願のタイトルなので率直に嬉し
いです。優勝が決まった今は嬉しさ
だけがありますが、もう少し時間が
経てばこれまでの道のりの長さを実
感するのかもしれない。

世界大会での個人優勝で波に乗っ
ているとは思ってはいなくて、ただ
単純にこの大会にかける思いが結果
に繋がったのだと思います。

◇（決勝の試合を振り返って）

思い切り試合をしようと思ってい
たところ、初太刀で一本が決まってし
まってびっくりしたというのが正直
なところです。渡邊選手は攻撃力が高
いので、一本取った後に守りに入ら
ず打たれてしまうので、二本目を狙い

◇ 世界大会が終わってから、少し気
持ちは乗らず自分の剣道がうまくで
きない時期がありました。大会の直
前まで自分の気持ちと向き合ってい
たのですが、今日は自分らしい攻め
る剣道を意識して、その結果優勝が
ついてきたような感じですよ。

◇ 来年の出場は決まっているので、自
分の「攻め続ける剣道」のスタイルを
崩さず戦っていきたいと思います。

◇（女子剣道選手権大会初の日本武道
館開催について）

日本武道館という会場で全日本の
試合を戦えるのは最高ですね。この
会場は多くの方が試合を見に来られ
るので気持ちが奮い立たされると思
います。

●入賞選手コメント
準優勝Ⅱ渡邊タイ選手

(熊本／熊本県警)

「悔しいの一言に尽きます。連覇を期待してくれる応援の声が多かったのですが、それに気を取られ過ぎると他の意識が疎かになってしまいうので、できる限り気にしないようにここ数カ月は過ごしていました。一本取られた後に、どうにか取り返そうという気持ちはありましたが、今思うと冷静になれなかったのかもしれない。」

去年は日本代表のキャプテンとして結果を伴っていない自分が許せずに「何がなんでも勝つ」という気持ちで臨みましたが、今年は世界大会が終わった後のフラットな状態での大会で、去年のような気持ちで臨めなかったかもしれません」



準優勝＝渡邊タイ選手

3位Ⅱ松本弥月選手

(神奈川／神奈川県警)

「最後の面は渡邊選手が得意としている技だったので、悔やまれるところですね。妹（松本智香選手）は妹で戦っているのです、試合について特別気にかけることはなかったですけど、あわよくば決勝で試合ができたらいいなとも思っていました。これからも自分の剣道を作り上げていく人生は続くので、今後新たに意識を変えるところは、一年一勝負だと思つて強さを求めていきたいと思えます」

3位Ⅱ妹尾舞香選手

(福岡／福岡県警)

「最後に打たれたところは自分が止まってしまったところなので、課題ですね。途中、相手を追い込んで打ちに飛び込んだところで決め切らなかったです。今年は世界大会の代表選手として強化稽古で多くの強豪選手と稽古できたことは、今の自分の自信に繋がっていると思います。まだまだ満足しているわけではないので、また予選からしっかり頑張っていきたいと思えます」

●注目選手

・加藤日向子選手

(鳥取／米子松蔭高3年)

女子最年少出場（18歳）。

「初戦の横山万優選手が上段の構えなので、対策を練ってきたつもりでしたが、全日本選手権のレベルは高く、対策を生かすことができませんでした。ただ、体の動きは良かったと思います。これからもこの全日本選手権の舞台に出続けたいなと思えました」

・佐藤みのり選手（東京／警視庁）

※世界大会Ⅱ個人3位

「自分が守りに入ったところを打たれました。どこかで勝負どころを作らなければいけないと思つていましたが、迷ってしまいました。悔しいですね。ただ自分の中では、世界大会から気持ちを途切らせることなく、良いコンディションで試合に臨めたとは思っています」

・末永真里選手

(和歌山／(一社)み・ゆーじ)

※世界大会Ⅱ個人準優勝

「調子は悪くなかったです。手元を上げてしまうのが自分の弱点なので、そこを打たれてしまったので仕

方ないです。年齢はベテランですが常に挑戦者の気持ちで試合しているつもりでした。体は動けているのですが、まだ気持ちが弱いみたいです」

・竹中美帆選手

(栃木／栃木県スポーツ協会)

※世界大会Ⅱ団体優勝

「自分の実力は出せたので悔いはないです。世界大会後も武道学会の論文の準備で忙しい毎日を過ごしていて、思うように稽古ができない日々が続いていましたが、かえつてこれまでの勝負に囚われていた気持ちから『自分の剣道をしよう』という気持ちに割り切れたので、楽しく試合ができました」

・松本智香選手（神奈川／神奈川県警）

※世界大会Ⅱ団体優勝

「妹尾選手とは大学生の頃からよく試合をしていて、いつも惜しい試合をして負けていました。今回も妹尾選手が最後のいい形で攻めていたので改めてその強さを感じました。目標としている姉（松本弥月選手）と決勝を争えたらとぼんやり思っていました、もしかしたら姉も思っていたかもしれないね」

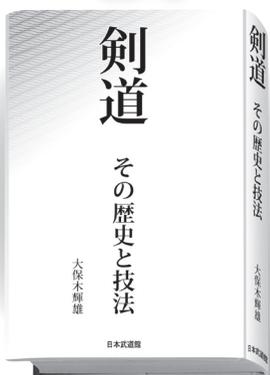
好評発売中!

剣道の歴史・技法を戦国期から現代まで時代を追ってわかりやすく解説。

剣道 その歴史と技法

埼玉大学名誉教授

大保木輝雄 著



四六判・上製・516頁・定価2,640円

◎ご注文・お問い合わせ◎

(公財)日本武道館 月刊「武道」編集部
〒102-8321 東京都千代田区北の丸公園2-3
TEL 03-3216-5147 FAX 03-3216-5158
<https://www.nipponbudokan.or.jp>

○日本武道館初の男女同時開催

全日本剣道選手権大会と全日本女子剣道選手権大会の同時開催は令和3年3月に長野県・長野市真島総合スポーツアリーナ（ホワイティング）で行われて以来、3年ぶり2回目。同大会はコロナ禍のため無観客で開催され、参加選手も警察官が出場を見送ったため、実業団・学生が中心の大会となった。

日本武道館で初となった男女同時開催の今大会は、例年以上に多くの応援の人々が会場を埋め尽くし、大きな声援と拍手が大道場内に響きわたる中で行われた。

網代忠弘全日本剣道連盟会長は開会式で「武道の殿堂、日本武道館での男女同時開催である本大会が、剣道史に残る大会になることは論を俟たない」と述べた。

【大会結果（男子）】

優勝||竹ノ内佑也（東京）
準優勝||合屋 龍（京都）
3位||棗田 龍介（広島）
松崎賢士郎（茨城）
優秀選手||濱崎 翔大（鹿児島）
山下 雄輔（三重）
水田 千尋（福岡）
池田虎ノ介（福岡）
足立 柳次（埼玉）
屋我 飛翔（愛知）

【大会結果（女子）】

優勝||近藤 美洸（東京）
準優勝||渡邊 タイ（熊本）
3位||妹尾 舞香（福岡）
松本 弥月（神奈川）
優秀選手||竹中 美帆（栃木）
水川 晴奈（岡山）
小川梨々香（埼玉）
松本 智香（神奈川）
小川萌々香（愛知）
太田 彩月（青森）